

















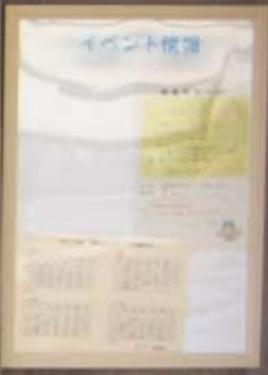
なつかしの
写真展

龍野幼稚園



三木露風家

三木露風家
開館日
休館日
入館料
人気の展示
人気の展示
人気の展示





ともに
露風と

A wooden plaque with Japanese calligraphy. The vertical text on the right side reads "露風と" (Rufūto), and the vertical text on the left side reads "ともに" (Tomoni).



中学校へ

兵庫県立龍野中学校へ首席で入学。
明治三十六年四月十五歳

詩歌中心の「結婚会」なる文学会をひろく同好の士を集めて（中学生を多く含む）作りました。

一方、俳句だけの「柿葉会」を設け露風は両者を主導しました。指導した少年文学会の者は、露風より年長の者が多くた。露風は彼等に雅号をつけた。

思想感情、言動等大人の如くであった。

「文庫」に発表した「書写山」は、大変な好評を博し、河井恭吉も注目した。

私は詩思をうへ、私の少年時代にして尚且つ思索に耽らしめたのは、何であらうかと私は考へて見ると、故郷の山川である。

中国漫遊は、山の甚だ雄大なのは無い。従つて豪宕なる風趣を求めるることは能きない。が氣候が全国中最も温暖で、寒暑のよろしきを得、殊に私の生まれた町の龍野は、山紫水明で四季の風物が詰和してゐる。少し高い所に登れば、周近くに、瀬戸内海の紫色の景色を眺望することができる。景色は只一部のみにしては全じと言ふことは出来ぬ。山の東、海の東、河の東、平野の東、更に又加へれば町の東をも見のがすことが出来ぬ。之等を総合して而かも天候やはらぐ地なり。春鳥に人を倦ましめない。それ故、近年私の故郷の龍野山は兵庫県に於ける国立公園の候補地とせられ、其の為に町からも請願書を差し出したと聞く。龍野山は眞に書いたやうに風致林として伐木を許されない好風の山である。私の誕生の家は、此の山の南麓なのである。私は山桜をながめて育つたのであつた。



龍野中学校正門

三木家略系図



三木家略系図



龍野の風景



朝日橋

更に言ふ—私に詩思を与へ、私の少年時代にして尚且つ要素に取らしめたのは、故郷の山川である。
（「我が歩める道」）

一度、橋上の中央へかかつた時であつた。一人の上級生らしいのが腹組みして近づき、よろけかかるやうなかつこうで露風にぶつかった。その時、肘でグイグイッと突いたのだろう。それを避けて進もうとするが、今度は反対側から出でたのが同じやうにぶつかった。われわれは急に危険を感じ出したので、三、四度び小突き組される露風と共に白刃の中をぐりぬける気持ちで逃げ出し、やつと橋を渡り終へたのである。平常運動などに出ないで生意氣に時人を気取つたりしてゐるので、上級生の蛮力から露風は睨まれてみて、機あらば制裁を加へようとした話しあつてゐたのが、この橋上の暴發となつたものだらう。

中学生の群れから遠ざかつてホッとしたが、「怪しからん奴だ。ほくはこれから奇監のところへ行つて談利します。あんな学校にゐるものか。退学しますよ。」と、露風は興奮に呼吸をはずませながら、肩をそびやかしていました。

（水守龜之助「続わが文壇紀行」）

小学校へ

龍野尋常小学校入学（明治二十八年六月）七歳

七歳 祖父から漢字を教えられ始め、房に起きて習字もした。

八歳 漢語「大學」の字習を終わつた。

九歳 兵庫県播磨国揖保郡内の各小学校連合の作文展覧会が開催せられ、其時、作文が各学年を通じての最優等の審査を受けて、展覧会場にその文が張られて、多くの人々の賞賛を受けた。

十歳 尋常四年生となつた。国語力の特に秀れたことを教師より認められる。山川の自然に興味を益々多くなつていた。

弟正夫 生まれる。母は齊藤シズ。

明三十一・十一・二十二 正夫は浅生山家に養子縁組。

龍野高等小学校入学

（龍野城趾にあつた
明治二十二年四月
十一歳）

祖母 俊死去（六十五歳）
枕元でその死を大変悲しむ。

 学籍簿



龍野高等小学校



龍野尋常小学校



12歳の頃

文学のめざめ

読書欲が旺盛になり、父所蔵の和漢の書を食庫より出して日夜耽読し、その書籍全部を読んでしまつた。

十三歳 新任教師 松本南樓の感化を受けて句作する。この頃の作に「赤とんぼ」とまつてあるよ竿の先」がある。後年、露風の童謡「赤とんぼ」の第四節にこの句が歌い込まれている。従兄弟・弟・士族屋敷に住む少年達の間で、鹿鳴舎版刷りの回嘯雑誌「少園」を作り、これを主宰した。

十四歳 「少園」の会名を「白葉会」と名づけ、小冊子「秋の花」を印刷する。（白は振保の清流、紫は蘿籠山の美しさ）「白葉山」は、龍野中学退学直前の明治三十七年九月下旬か十月に作詩して「文庫」に投稿。掲載誌「文庫」は明治三十七年十一月十五日号。

束髪にいばらを刺しけり夏姿 露風

そのころ、吉文・致運動が少年の間にも普及し、露風も盛んに吉文一致の文章を作つて、少年の投稿雑誌「少国民」を初め、「中学文壇」「秀才文壇」にも作品を寄せると共に、「姫路新聞」や「鶴城新聞」の文芸欄でも活躍するようになつた。

三十六年には「吉文一致」「少国民」改題、「中学校」「秀才文壇」等の誌上に詩歌・散文・文芸評論を発表し、注目された。



高等小学校卒業写真
露風は後列2列目の右より3人目



校長 橋本三之助

譜生

御遺二十二年二八八九六月二十三日

以德治國與德學思想

三



当時の上野城



新羅朝鮮或所時代の経験た



4歳の娘の書類

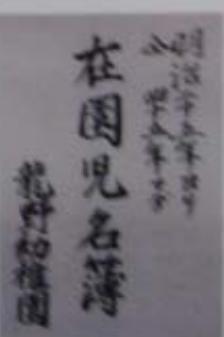


新编小学教材全解（小学数学四年级）

卷之二

アーリーの言葉から始める
「おはようございます」

卷之二十一



第四课



授業料標準料金



卷之九

「アーヴィング、お前はおれの娘の嫁の親友だ。おれがお前を連れてお出でにならぬか？」
アーヴィングは喜んでうなづいた。「アーヴィング、おまえはおれの娘の嫁の親友だ。おれがお前を連れてお出でにならぬか？」

前回の記事で、「アーティストとしての音楽家」と題して、音楽家のアーティストとしての側面を述べた。その中で、音楽家がアーティストとしての活動を展開するうえで、最も重要な要素である「音楽性」について、その特徴や構成要素などを解説した。

通鑑小學校勘合集

行と営む

卷之三

卷之三

ふるひの山河

春風

あらそと
さくらんぼ
さくらんぼ

おきんち
おきんち
おきんち

遠くへ
だれりは
おきんち
おきんち
おきんち

別れた母への想い、少年時代の追憶

喜風は母との別れによって、心の孤独、寂しさ、空白を埋めるかのように自然の中に身を籠り、文学にのめり込んでいく。実母がたとの別れが、後の喜風の人間形成、詩作などに大きな影響を及ぼしていった。

西原は大正十五年「かた」の精神ノートに、即くの思いをつづけている

櫻
下

おつかれ。
どこへ行つたのか。
机の下で、
机「ア、も、
おつかれ、かくらぬ
ごんぐ」といふ

うちのお内の、
外に奥いた、
桜のそばで、
たゞ一人、
私は、おつかいん、持つてある、

種の花が、
ひら、ひら、散つた。
もう残るに、
どうして、いた。
はんてに、さびしい、さびしいな

三八八

龍風の詩稿ノート「桜の下」

三木露風生家改修工事 (耐震補強について)

三木露風が幼少期を過ごした住宅を当時の姿へ修復するため、見えない部分での補強を施し、安全性を確保しました。

耐震補強の一例

1 壁柱の軽量化

既存柱の壁柱剥離法(瓦の下に土を敷いて剥離する工法)により施工されており、壁柱重量が非常に重たく耐震性を低下させる要因となっていました。そこで、今では古い瓦を一枚一枚丁寧に取り外し、引換け性高さ工法(壁柱下地に柱木を行き分け、瓦を引っ掛ける工法)で施工するため、瓦に穴を開け加工して、高さ減らしました。

これにより、壁柱は古い時の半分で、1mあたり約50kgの軽量化に成功しました。



土を除去



瓦の加工



引換け性高さ

2 耐力壁の設置

既存は、柱や梁の太さだけではなく、地震の震れに有効に働く壁の存在が耐震性に大きく影響します。当施設でも、新たに土台と壁を設けて、土台、柱、壁、梁が一体となりた耐力壁を各所に設置することで耐震性を向上しました。また、調節の耐震金物を設けて、荷重部の補強も行いました。



3 コンクリートによる足元固定

従来の和風建築は、柱が石の上に立っているだけで固定されていませんでした。そのため、地震の揺れなどにより建物自体がゆがんでしまう恐れもあります。そこで、建物にかかる大きな地盤力を地面に逃がす効果も得られ、さらに白アーチなどの対策にもつながるため、床下をコンクリートで一体化しました。



コンクリート打ち



ジャッキアップで柱を切削し、土台を設置する



穴を開める

たつの
市立 龍野歴史文化資料館

開館中

直進して
右折

m

たつの
市立
龍野歴史文化資料館

